
crack moon

蒲公英

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

crack moon

【Nコード】

N4375Q

【作者名】

蒲公英

【あらすじ】

坂口柊子・三十八歳。孤独に麻痺した生活の中に、ひとつだけ色をつけるものが混入した。自分が何を欲しているのか理解ができないうちに、色は広がってゆく。選択を迫られた時、自分が手を伸ばすものは何か。

女が自分の生理に従おうと思った時、麻痺した生活は動き始めます。

朔（前書き）

不定期に更新します。

朔

祖父が残した広い庭は、盛大に花びらの散る大きな木が何本も植えられて、夏には涼しい木陰を作る。

秋深くにはすべての葉を落とし、満月の日の夜半、月は重なった枝越しにひび割れる。

この月を見上げる者は、私しかない。

かつて夫と名乗る人は居た。

「おまえを抱いても、まるで虚無を抱いているようだ」

彼はそう言つて去つていった。

追わなかった。否定もしなかった。

自分の中ががらんどうなのは、私自身よく知っていたから。

何かに強い関心を持つことなどできなかった。

死に対する憧憬など持つてはいなかったが、生に対する執着も希薄な気がしていた。

それは幼い頃からの感覚で、自分が普通でないのだと思ったことはないし

書物で読むような強い怒りや、きらめくような恋は現実にはないものだと思つていた。

「彼に捨てられたら死んでしまう」

そう言つて泣く友人を見て、驚愕したことを覚えている。

コノカンジョウハ ニンゲンノ モチウル カンジョウダッタノ カ

夫と別れたことに関して、唯一安心したことは両親が知り得ないという事だった。

仲の良い夫婦だった両親は、まだ私が結婚生活を継続している最中にたてつづけに亡くなった。

一粒種の一人娘だった私は、とても愛されて育ったし幸福だったと思う。

父が亡くなり、翌年に母が同じ病を得た時には、やはり辛かった。葬儀の最中、感情は薄紙のかかったような朧さで、泣くこともできなかった。

夫はそれを「鈍い」と言った。

両親の部屋を片付けながら、まだそこに居るような気配を思い「お母さん」と呼びかけた私に対して。

相続した家に住もうと言ったのは、夫だった。

あの木を伐ってしまったえば、風通しも良くなるし――

祖父の植えた桜や木蓮を、私に伐ることはできない。

どちらにしろ、彼はもういない。

広い庭には似つかわしくない小さな家に、住み続けているのは私一人だ。

もう2度とセックスなどすることはないだろうと思ったのは、離婚後何年も経ってからだった。

気がつくと四十に手が届くほどの年齢で、ぼんやりと過ごしているうちに時間だけがまわっていく。

住まいはあるし、早くに亡くなった両親の僅かな保険金と、それよりも僅かな在宅の仕事で

生涯の間食べていくことはできる。

家の外に勤めを持たない私は、ほとんど他人の顔を見ることもなく、喋ることもしないままに一日が終わる。

寂しくないかと問われることは、ある。

思い出したように訪れる古くからの友人が、持参した料理を小鉢に移しながら言う。

「まだ若くて綺麗なんだし、恋愛くらいしなさいな。私みたいに所

「帯じてないし」

そもそも、私は何故結婚などしていたのだろう。まわりが次々と結婚していく中、私も同じように申し込んだ相手と交際して結婚した。

生活は安定し、彼は優しい夫だった。

だから、それが幸福なのだと思っていた。

朝食を作って送り出し、自分の仕事を済ませて夕食の支度を終えた頃、彼が帰宅する。

「おまえはクールだね、帰ってきてても当然の顔をしているだけだ」

お帰りなさいと飛びつけば、彼は満足したのだろうか。

「俺のことは好きか」

「結婚したじゃない」

「好きで結婚したのかと聞いてるんだ」

これは、結婚生活の最後のほうの会話だった。

私なりに、夫を愛していたと思う。

けれど今思えば、彼でなくてはいけないという強い感情を抱いたことはなかった。

それは生活に必要なものだろうか？

確かに両親の首をすげ替えることは考えられないが、友人がいつの間にか友人になるように

何度か肌を合わせた男女が夫婦になるのは、ごく自然の流れなのではないか。

終わってしまった関係を、思い返すのは詮無いことだけれど。

理解できるのは、彼が「私を気に入らなくて」出ていったということだ。

それについて、彼を恨んだり憎んだりはしていない。

彼が苦しそうな顔をしているのを見ていたし、それを私はどうする

こともできなかった。
そういうことだ。

夜に庭に出る習慣がついたのは、どれくらい前だろう。

ひとつポツンとたたえたガーデンライトの横に立ち、紅茶の入ったマグカップに唇をつける。

夏にはよく茂った葉を見上げ、冬には月の方角を確認する。

ウェブ・デザインの仕事をしているので、疲れた目を休めるためでもある。

私に造園の才能はないらしく、木は祖父が植えたままで、両親がたくさんの花を咲かせていた花壇は
だんだんとみすばらしいものになってきている。

秋が深くなっていた。

残り少ない葉は、梢でかさこそと揺れる。

明日も、朝一番で通りに落ちた葉を掃き集めなくてはならない。

田舎でもなければ都会でもない、この地域で暮らしていくためには、それなりの気遣いがある。

「離婚したの？」

そんな風に不躰に訊ねてくる人はいなくとも、女の一人暮らしは行き届かないと言いたがる人がいることは知っている。

生まれ育ったこの地で、顔を隠して生きていくことはできない。

大判のシヨールを肩に掛け、サンダル履きで庭に出る。

まるで童話のおばあさんのようだが、と自分の身掬えが可笑しくなることもあるけれど

この庭は私一人のもの、夜半に覗き込む人などいない筈だ。

古い住宅街の夜は早い。

家々の灯りは八割方消えている。

「あのう、すみません」

フェンス越しの声が、私に向けられたものだと思いつくの時間がかった。

「すみません、ちょっと」

若い男の声は、私に向かって呼びかけていた。

「何か、御用ですか」

フェンスに寄った私の目に映ったのは、オートバイのハンドルに手をかけた、ひよろりとした姿だった。

織月

街灯とガーデンライトだけの明るさで、顔はよくわからない。

「すみません」

若い男はもう一度言っ、首だけを動かした。

どうも、頭を下げる動作だったらしい。

「明日の朝まで、こいつ（とオートバイに目を落とした）を置かせて貰えませんか」

まだ二十歳前後の体つきだろうか。

私が黙ったままだったので、彼は仕方なさそうに言葉を繋いだ。

「エンジンが急に止まっちゃって押しがけてもかからないし、ここはまだ駅から遠いでしょう？」

駐輪場は見つかんないし、置きっ放しにもできないんで困っちゃってて」

ああ、そういうことか。それで一晩庭に停めさせることくらい、なんでもない。

「構いませんよ。そちらからまわると、車庫がありますので、そちらにでも」

答えると、ほっとしたような溜息が聞こえた。

「良かったあ！もう、足も肩も死にそうで。助かります！」

死にそうだとは思えない元気さで、彼はオートバイを動かしはじめた。

気がつくと、冷える夜間だというのに上着は腰に巻き付け、長袖のシャツを肘までたくしあげている。

車庫で私の小さな軽自動車の横の場所を指示すると、オートバイをそこに駐車した彼は、改めて私に視線を向けた。

街灯が近くなり、今度は顔が見える。

青年になりかけた少年、そんな表現で通じるだろうか？

首は細く、顎のラインがくつきりと美しい。

シャツは汗ばんでいて、どれくらい長い距離オートバイを押してきたのかと気の毒になった。

「助かります！明日、引き取りに来ますから」

笑った顔にはあどけなさが見え、それが私の警戒心を解いた。

「オートバイは置いてもいいけど、あなたは？帰る場所は近いの？」
彼は五つ六つ先の駅名を答えた。

「電車はもうないわよ。どうやって帰るの？」

「歩きます。始発を待つのとどここの時間だし、公園で寝られる時期じゃないんで」

はきはきした口調と話す時の視線に、育ちの良さを感じた。

「それは大変すぎるわ。送りましょうか？小さな車がイヤでなければ」

「そんなにご迷惑をお掛けできませんよ。大丈夫です、若いですから」

本当に申し訳なさそうに言うので、却って好感を持つ。

「ヒトリモノですから、誰にも迷惑はないですよ。それとも、こんな歳上とドライブするのは気が引けますか？」

再三固辞する彼を半ば強引に車に乗せたのは、ひよろりとしたシルエットが頼りなく見えたからだろつか。

松村涼太と名乗った彼は、幼さの残る顔でしきりに恐縮した。

「大学生？」

「専門です。3年しかない。来年は就職が決まっていけばいいけど」
義肢装具士という資格をはじめて耳にした。

「こんな時間に、本当に申し訳ないです。オートバイは明日、引き取りに行きます。勝手に出していいですか」

普段他人と話すことの少ない私に、人間の声は懐かしい。

「お礼は改めて・・・えーと？」

「坂口柊子。でも、お礼はいらないわ」

道が入り組んでいるからと彼は大きな通りで降りて、最敬礼で私を見送った。

巢から落ちた雛鳥を救ったら、それは思いの外育った鳥で、よく響く声でさえずりを聞かせてもらった。

そんな気分だった。

近所の人間でもなく、仕事の請負元でもない人間と話したのは、どれくらいぶりだったのだろう。

奇妙に浮き立つ気分で自動車を走らせた。

翌日、松村涼太はオートバイショップの軽トラックに自分のオートバイを積み込んで、店主と一緒に去っていった。
ひとり暮らしでは消費するのに何日もかかりそうな菓子折が残った。
去っていくトラックを見送りながら、予感が残る。

彼には、もう一度会いそうな気がする。

連絡先など当然知らないし、どこかで会うことなどけてない筈だけれども。

そして、共通点を見出せない彼と私の間に、何らかの繋がりが築かれる筈もないのだけれど。

庭の木々は葉を落とし、夜の空気が一際冴える季節になった。
唇にやさしい陶器のマグカップの紅茶ではなく、ステンレスの保温用マグカップで温めたワインに切り替える頃だ。

アルコールはあまり得意じゃない。

酔いそうになると、自分にブレーキがかかる。

あなたには酔った拳句の戯言ってというのができないから、相手する男は大変ね。

ずいぶん昔に、そう言われたことはある。

家の前で、大きなオートバイが止まった。

「しゅーこさん、こんばんは」

ひよろりとした影から、夜半の静かな住宅街に似つかわしくない声がした。

眉月

松村涼太の登場は、前回と同じくらい唐突だった。

私は、やはり大判のシヨールを肩に掛け、サンダル履きで空を見ていたのだ。

「近くを通ったから、ちょっとこの道に回ってみた。会えて良かった」

何故わざわざ？と疑問に思うよりも、住宅街に響くエンジン音が気になった。

「ごめんなさい、エンジン切ってくれる？このあたりは、夜とても静かなの」

素直にキーを回した涼太は、前回と同じ場所にオートバイを停めて、庭に入ってきた。

「おお寒。冬にオートバイなんて、マゾだとは思えない」
自分のことなのに、軽々と笑う。

「しゅーこさん、こんな夜に庭に出て寒くないの？」

二回顔を合わせただけで砕けた物言いになるのは、若い証拠だ。

「一日中家の中にいるから。時々外の空気を吸わなくちゃ思ってた」

「外に出ないの？オトナのヒキコモリ？」

「家で仕事してるのよ。買い物と納品にしか外出はしないの」

涼太は私が手に持っているマグに目を留めた。

「それ、暖かいもの？一口頂戴」

友人とどころか、家族とでさえ飲み物をシェアしたことなどない。どう答えて良いのかわからないうちに、涼太は私の手からマグを引き抜いた。

それから一口飲んで、酒だ、と呟いた。

「オートバイなのに、それではいけないでしょう？紅茶を入れてきましようか？」

彼は一体、何をしに来たのだろう。

「ちよつと回り道しただけだから、いい。すぐ帰るし」

涼太は私にマグを返しながらそう言った。

「何か御用だった？」

若くて綺麗な娘ならいざ知らず、私の顔を見ても仕方ないだろうに「なんでかな。なんとなく、しゅーこさんが毎日庭にいるような気がした」

涼太は笑いながら、もう一度なんでかなと呟いた。

「広い庭だね。ヒトリモノって言ってたけど、住んでるのもひとり？」

「ええ、そう。両親が遺してくれたものの」

「寂しくない？」

寂しくはないような気がする。

実は、自分でもよくわからない。

静かな住宅地にオートバイの音が響く。

涼太は3日と置かず姿を見せた。

「しゅーこさん、こんばんは」

夜には場違いな明るい声が私に呼びかける。

「バイトの帰りにこの辺を通るの。そうすると、しゅーこさんが庭にいそうな気がする」

毎晩、遠くから聞こえるオートバイの音が私の注意を惹く。

二度三度と続いたある日、隣の家の主婦に声を掛けられた。

「柊子ちゃんの家、最近夜にオートバイのお客さんが来るのね」
ぎくりと心臓が鳴る。

「すみません。仕事を立て込んでいて、夜にバイク便を何回か呼ん

だんです。ご迷惑でしたか」

貼りついたような笑顔になる。

「ああ、そう。柊子ちゃんの家でお仕事なものね。家の中ばかりじゃ、旦那さん見つけれないわねえ」

「ええ、良い人がいたら紹介してください」

心にもない近所との会話は、もう苦痛を伴わない。

「しゅーこさん、こんばんは」

その晩現れた涼太に、もう来ないように告げたのは、近所の目の煩さを懼れているだけだと自分でもわかっていた。

「なんで？俺が来るの、迷惑？」

そうじゃない。涼太がここに来る目的はわからなくても、私の元に訪れてくれるのは嬉しい。

近所の人との挨拶や、仕事の申し送りとは違うのだ。

「この辺は年配の方が多いの。ご近所にね、オートバイの音が迷惑だから」

「だってここは公道でしょう？何か言われたの？」

「いいえ、でもそう思うの。涼太君だって、おばさんの顔見たって仕方ないでしょう？」

思いがけない強い視線で、涼太が私を見返した。

「しゅーこさんは、おばさんじゃないよ。俺はおばさんだと思ったことない」

この視線の強さは、何を意味しているんだろう。

「でも、迷惑だったらやめる。ごめん」

涼太は大通りに行ってからエンジンをかけると言って、オートバイを押しながら出ていった。

迷惑だったらやめる。

その言葉は、私に惜しいものを壊した気分を与えた。

赤ワインを温めて、オレンジピールとシナモン少々。

保温マグの中身を少しずつ飲みながら、重なった枝の間の空を見上げる。

雨の降る日は家の中で、少しだけ窓を開けて雨の音を聴く。
一人でいることは、怖くない。

遠くに聞こえるオートバイの音。

もう、来ることはないだろう。

夜に人恋しくなっていたりして、誰でも良いからと訪れていたんだ
ろうか。

「しゅーこさん、こんばんは」

マグを取り落としそうなほど驚いて、声のするほうに目を凝らす。

「何故？」

「向こうの通りに停めてきた。歩くと、確かにここは静かだね」

涼太はのんびりと庭に入ってきた。

「それとも、俺自体が迷惑だった？」

右手にヘルメット、その中につつこんだグローブ。

「迷惑だなんてことはないわ。だけど、何故来るの？」

涼太は少し考える顔になった。

「しゅーこさんが庭にいるかと思うと、来なくなるんだよ。何を
見てるの？」

「空を」

涼太は空を仰いで、枝が邪魔だねと言った。

「枝で切り取った空が好きなの」

「俺は広くて青い空がいいな。夏に北海道にツーリング行った時
み
たいな」

それが似合う、明るくて無邪気な口調。

私の持っていない人懐こさに圧倒される。

若いだけじゃない。私はこんな風に、他人とかかわりあいを持つと
とすることはできない。

「また、来てもいい？この通りにオートバイで乗り入れないから」
「楽しくはないでしょう？」

涼太は少し言葉を探す風だった。

「外から声かけた時ね、しゅーこさんと庭が、すごく似合いに見える
たの。なんか小説の中覗いたみたいだった。

だから今、読みかけの本を楽しみに読んでる感じ」

意味を掴み損ねているうちに、涼太は庭から出ていった。

夕月

天気の良い日が何日か続き、小雨が曇まじりになった日だ。ストーブにかけた薬缶からはしゅんしゅんと湯気が音を立てる。通りは静かだ。

仕事を終わりにすることにしてモニタから目を離し、USBにバックアップをとる。

目の周りをマッサージして、伸びをする。

自分だけで仕事をしていると、時々根を詰めてしまつて遅い時間になる。

天気の良い日は、庭には出ない。

キッチンで茶葉をはかっていると、勝手口から小さなノックが聞こえた。

表札には父の名をつけたままだし、知らない人ならば女のひとり暮らしだとは思わない筈だけれど、こんな夜中に人が訪れることなんて、あるわけがない。

動かずに気配を消した方が良いのか、それとも人が複数いるかのよ
うに、テレビなどつけた方が良いのか。

もう一度、ノックがあつた。

「どなたですか」

抑えた声で訊くと、思いがけない返事が戻つた。

「しゅーこさん、こんばんは。庭には出ないの？」

身体の中から緊張が抜け落ちて、何も考えずに扉を開けた。

「雨が降っているでしょう？こんな冷たい雨の中、外には出ないわ
うっすらと濡れたジーンズで、涼太は立っていた。

「そつだよ、そつは思つただけだ」

若い男を家に入れるのに、抵抗がなかったわけではない。

身体をどこも締め付けない部屋着にカーディガン、ざっくりと厚手の靴下。

こんな格好では庭にだって出ない。

居間の隅でまだ光っているパソコンと、その横の床に投げ出した膝かけ。

庭では見えない「生活」が、そのまま晒されてしまう。

けれど濡れたジーンズで凍えた顔の涼太を、そのまま帰す気にはなれなかった。

ストーブの前に座らせ、タオルを渡す。

「雨でもオートバイでアルバイトに行くの？」

「うん、電車だと帰りが面倒だから」

「若いわね、さすが二十歳」

「しゅーこさんて、いくつ？」

「女性に歳を聞くの？でも、内緒じゃないからいいわ。三十八」
年齢を隠す習慣はない。

「俺の母ちゃんと同じだ。うわ、そうは見えない！」

そうか、十八で子供を産めば、こんなに大きな子供がいる計算になるのか。

「若いお母さんなのね」

「そ、高校中退で俺産んだの。親父が頑張ってくれてなきゃ、俺は水子になってたね」

母と同じ年齢、という言葉に少し寂しさを覚えたが、それではと納得もした。

気を許せる相手に思えるのだろう。

身体が温まるように、紅茶の中にブランデーを一滴垂らした。

金色の輪が浮いた。

座っていたって、話題などない。共通点はひとつもないのだから。
「こんな日に寄り道なんかしたら風邪ひくわよ」

珍しそうに部屋の中に視線を巡らす涼太に紅茶の入ったマグを渡す。

「ごめん。本当は、毎日来てた」

涼太は抱えていた膝を、小さく抱えなおした。

「はじめは通りがかりにいればいいなって思ってたんだけど。この頃は毎日、いないかないかってウロウロしてた。最近雨が多くて、しゅーこさんは外に出てこないし、今日はキッチンに影が見えたから」

長い手足を窮屈そうに折り曲げて、居心地の悪そうな顔をしている。それを誰かに見られていやしないかと、ひやりとする。

「わからないわ。恋人はいないの？」

「セックスする相手が恋人だってことなら、いる」

溜息をついた。まったくもって理解しがたい。

この男の子は、自分がどうして私の庭を訪れるのかなんで、どうでもいいのだ。

「気になるから」気にして「話しかけたいから」話しかける。

それに対する理由を、自分に問いかけることもしない。

「しゅーこさん、呆れてる？」

「子供だとは思ってるわ。こんな夜中に、女の家を訪ねるものじゃないのよ。」

住んでいるのは私ひとりでも、ご近所が目にすることはあるかも知れない」

「迷惑？」

人懐こい子供が、そのまま身体だけ大きくなっているのだ。

他人の表情を見ることに、長けていない。

「いいえ。話しかけてくれるのは嬉しい。少しまわりに気を配って欲しいだけ」

小さな子供に言い聞かせる口調になってしまった。

翌日は久しぶりによく晴れた晩だったけれど、涼太は現れなかった。その翌日も翌日も。

もう来ないのかも知れない。

フェンスに目をやりながら、やはり失くし物をした気分になる。

私も、待っていたのだろうか。

弓張月

涼太が庭に訪れなくなつて、二週間が経つた。年の瀬が近い。年内の納品がいくつか重なり、買物もネットで済ませると、一日中他人の声を聞くことがない。

仕事中、つけっぱなしのラジオと会話する。

夫がいれば、最低限の会話はあつた。

朝の挨拶や夕食の献立、帰り時間の連絡、最後の方では諍いめいたこと。

今まで恋しくはなかつた「自分に呼びかける声」を懐かしく感じてしまうのは、涼太が癖を残したからだろうか。

庭で温めたワインを口にしながら、月を見る。

白く光る半分の月に、枝が突き刺さる。

「しゅーこさん、こんばんは」

庭の中から声がした。

「もう、来ないのかと思つた」

涼太は、普段にない曖昧さを顔に載せて笑つた。

「いろいろ考えてた。彼女と別れたりして、ゴタゴタしてたし」

失恋していたら、私どころではなかつただろう。

学生の頃には友人との話題のトップは「恋愛」だった気がする。

「若いうちには若いなりに、しなくてはならないこともあるものね」
慰めも同意もいらないだろう、そう思つた言葉だった。

「いろいろつていうのは、しゅーこさんのことだよ。俺はなんでここに来るのかつてこと」

ゆらりと涼太の影が寄つた。

まっすぐ私を見る目から、視線が外せない。

今頭をよぎったものが、間違いでありますように。

「お母さんと同じ歳だから、話しやすいんじゃない？」

軽口に聞こえるように祈りながら、一歩下がる。

「しゅーこさんが、呼ぶんだよ。」

「呼んでないわ」

涼太が私にもう一歩歩み寄る。

「呼ばれるから来るんだ」

もう一歩あとじさつたら足に木の根がひっかかり、そちらに気をとられた。

「呼ばれるんだよ」

強い力で首を押さえつけられ、強引に仰向かされた。

何を、と言いかけたまま唇が押し付けられ、熱い舌が私の唇に割り込んでくる。

両腕で涼太の胸を押しやろうと力を込めると、逆にもっと強い力で涼太の腕が背に回りこんだ。

舌を絡めとられ強く吸われて、息ができない。
身体力が抜ける。

首を押さえた手が、そのまま滑るようになじを撫で、背筋にゾクリと粟が立った。

緩んだ唇から洩れた溜息は――
自分が驚くほど、女の声だった。

唐突に腕を離れた涼太は、そのまま自分が驚いたように目を見開いた。

「勝手なことを言わないで」

言いかけたところで、隣家のキッチンに灯りが点くのが見えた。

普段なら、もう眠っている筈の時間なのに。

話し声が聞こえてしまったのだろうか。

夜に若い男が庭に入ってきている——これは好奇の対象だ。

「帰って頂戴。あなた、おかしいわ」

言いながら、手にマグを持っていないことに気がつく。

いつ、手から離れたのだろうか。

涼太のジーンズには、大きくワインのシミが広がっている。

隣家の手洗から音がする。

「しゅーこさんが、呼ぶから」

もう一度そう言ってから、涼太は庭を出ていった。

駐車場を通り抜け、フェンスのあちら側にひよろりとした影が足早に去る。

足元に転がったマグを拾い上げながら、混乱した頭を整理しなくてはと思う。

土のついてしまったマグを洗い流しながら、涼太の声を繰り返して聞く。

しゅーこさんが、呼ぶんだ。

呼んだだろうか？もの欲しそうな態度で、涼太に接していたのだろうか？

何を欲しがって——

自分の口から洩れた女の声をもう一度聞く。

濡れた手で、自分の口を押さえた。

そんな筈はない。

そんなことを望んだことは、ない。

布団の上に座り込んだまま、身体を横たえることもできずに夜が明けた。

「柊子ちゃん、夜に庭でお話していた？」

「いいえ」

「じゃあ、誰か通りを歩く人がいたのかしらね」

顔が強張るのを無理矢理笑顔にする。

誰かに迷惑を掛けているわけではないのに。

彼女だって悪意からではない。

子供の頃から知っている私のひとり住まいを案じて、気にかけてくれているだけなのだ。

納品のデータを送り、細かな直しのチェックがないと確認した段階で、パソコンの電源を落とした。

少しだけ眠るつもりでソファに横になり、毛布で身体を包む。本格的に眠るには、少し早すぎる時間だ。

目を閉じると、深い場所に吸い込まれるような睡眠が来た。

ああ、昨晚は眠れなかったのだ。

涼太の声が深いところから聞こえる。

寒い、と目を覚ますと、もう夜半を過ぎていた。

ストーブは時間超過で消えており、部屋が冷え切っている。

たとえ涼太が庭を覗き込んだとしても、私の姿さえなければ帰っただろう。

少しのつもりでずいぶん眠ってしまっていたのだ。

風が強い。木の枝の揺れを確認するため、厚い遮光カーテンに隙間を作ると、窓の外が揺れた。

「いないのかと思った」

「いつから居たの？」

「一時間くらい前」

そんなに！通りに目をやってしまう。

誰にも見られなかったことを祈る。

「帰らないかも知れないと思わなかったの？」

「十分だけ十分だけって思っている間に時間が経った。寒かった」

涼太は本当に凍えた顔で、途方に暮れたように言った。

「顔だけ見たら帰ろうと思ってたのに」

扉を開ければ何が起こるのか、知らない筈はなかった。

知らない筈はないのに、気がつかないフリをした。

「お茶だけなら、用意するわ。身体を暖めて帰りなさい」

勝手口の鍵を外した。

十三夜月

自分の使っていた毛布を片付けて、涼太を座らせる。

「もう遅いの。ご両親も心配するでしょう?」

「飲みに行くこともあるし、友達の家から学校に行くこともあるから」

「連絡くらいはするものよ。お茶を飲んだら、ちゃんと帰りなさい」
窘める口調は、意識したものだ。

では何故家に入れてしまったのか。

その場で「帰れ」と言い捨てて、カーテンを鼻先で閉めることもできたのだ。

キッチンで茶葉をはかり、小さな手鍋に湯を沸かして茶葉を入れる。
ミルクと黒砂糖を入れてから沸騰する前のタイミングに火からおろして、ストレーナーを通す。

手慣れた一連の作業に、少し気が緩んだ。

昨晚のことは忘れてしまえば良いのだ。

若い時には、自分の言ったことに感情が煽られることは珍しくない。
母親と同じ歳の女になど。

涼太の目の前にマグカップを置き、自分は向かい側でラグの上に直接座る。

仕事の丈の長いフリースのシャツに、スパッツ。

外出する時でなければ、化粧はしない。

涼太の目には、暗い所で見るよりはるかに歳上に見える筈だ。

熱いロイヤルミルクティーに舌を焼きながら、涼太がマグに口をつけるのを見ていた。

若い両親は、彼を大切に育てたんだろう。

姿勢が綺麗で、飲み物を口に運ぶ仕草が卑しくない。

はじめに会った時にも、はきはきと話をする子だと思った。
今まで誰からも、強く否定されたことなどないのだろう。

「しゅーこさん」

名前を呼ばれて、慌てて思考を戻す。

「冗談とか気の迷いとかじゃないからね」

「では、間違い。涼太君の相手は、こんなにおばさんじゃない」
視線に張り付けられる。

涼太が立ち上がるのが見えた。

「しゅーこさんを、おばさんだなんて思ったことない」

座った私の横に膝がつく。

見上げた視線が急に遮られた。

視界を覆う肩の線に気がついた時に、首に暖かい息を感じた。

「しゅーこさんは、女の匂いがする」

首にそのまま唇が触れる。

背筋に沿って何かが駆け抜けた。

逸らすように顔を傾けると、ぐい、と肩が引き寄せられる。

「自分でもわからないんだ。しゅーこさんがいると思うだけで、ここに来なくなる」

手に籠められた力は強引なのに、言葉の響きは哀願だ。

こうなることは知っていて、扉を開けた。

はぐらかすフリをして、自分の意思ではないのだと誰に証明するつもりで？

涼太の舌が口の中を隈なく動きまわる。

ゆっくりとラグの上に横たえられた身体を、服越しに確認されて目を閉じる。

部屋の灯りがついたままだということに気がつく。
シャツの裾から入った手が木綿のインナーを押し上げた時、私の口から出た言葉は「暗くして」というものだ。
これは、了解の言葉に他ならない。

立ち上がって灯りのスイッチを切る涼太の姿が見えないように、両手で目を覆った。

足音が戻り、手が引き剥がされてもう一度、私の唇を割って舌が侵入してくる。

その間に指はシャツの中を動き回り、探していたものを見つけ出す。びくん、と背が浮く。

勢い付いた手がシャツを押し上げ、涼太の頭が胸に沈んだ。溜めていた息が漏れる。

自分の指が涼太のシャツを通した背骨を数え始める。

「しゅーこさん」

涼太の声が耳元で掠れる。

性急に動く涼太の背にまわした手の先に、力が入る。

「しゅーこさん」

短い呻き声をあげて、覆いかぶさった涼太の体重を受け止めた。

細い腰、しなやかな筋肉のついた腕。

涼太の髪の中に手を差し込みながら、ふとカーテンに目を留めた。

カーテンを開けたあちら側に、夜の庭がある。

太り始めた月に枝がかかっているだろう。

「しゅーこさんの手は、あつたかくならないんだね」

涼太が私の指を、手に握りこみながら言う。

厚手のラグの上で重なり合ったまま、涼太は一言「ごめん」と言った。

どういう意味の謝罪なのかは、知らない。

求めたのが涼太であっても、了承したのは私だ。

服を着終えてグズグズしている涼太の背を、押し出すように勝手口の扉を開けた。
どろり。

中から流れ出してくる感触に顔を顰める。

湯船に湯を張りながら、服を脱ぐ。

何か重大なことをしてかしてしまったような、それでいて当たり前のことをしたかのような

背反した感情が自分をまた混乱させる。

涼太はもう、無邪気な顔で庭に入ってくることはないだろう。

スポンジにたくさんの泡を立てて身体を洗い、湯船に膝を抱えて座った。

私はもう、通りすがりの人の顔で涼太に接することはできない。

年増が若い男を啜え込んで――

自分の想像ほど、世間が悪意に満ちてはいないことは知っている。

夜の庭に立つて見上げる月は、枝に邪魔されて輪郭が途中で遮られる。

今日は月の形を見ていない。

夜半の庭で、月よりもフェンスのあちら側のひよろりとした影を探しそうな自分が見える。

裸の膝に顔を埋めて、身体が暖まるのを待つ。

しゅーこさんの手は、あったかくならないんだね。

まるで虚無を抱いているようだ。

同じ言葉だろうか？

涼太もそう思っただろうか？

そもそも、私は涼太に何かの感情を抱いていただろうか。

連絡先を聞きたいと思ったことはない。

彼が他にどんな顔を持つのか、知りたいと思ったこともない。

夜に私の庭を訪れ、人懐こく私に話しかけてくるだけの若い男の子。けれど扉を開けたのは、紛れもなく私だ。

小望月

月が白い。

涼太は黙って庭に入り、横に立つ。何も言わない。

私も話しかけない。黙って勝手口の扉を開ける。

三度も続くと、最初の日におずおずと靴を脱いでいた涼太は、手馴れた風にスニーカーの靴紐をほどくようになった。

寝室には入れない。

居間でだけ繰り返される。

「しゅーこさん、たまには外に出ようよ」

「夜に？」

「なんで夜？学校、もう冬休みだもん。映画とか、水族館とか」

「いや」

涼太はまだ学生なのだ、若いのだと実感する。

「俺、しゅーこさんが声上げて笑うところも見たいことない。一緒に同じもの見て、感想を言い合ったりしたい」

思い出を共有することに、意味を見出すことができない。

それは結びつきを強めたいと思っているときに考えることだ。

——私は、涼太と結びつきを強めたいと思っているわけではないのか。

では何故涼太を家に入れ、身体で彼を受け入れるのだ。

「泊って行きたい。しゅーこさんがどんな生活してるのか、見たい」
「ダメ」

灯りを消した部屋の窓のカーテンを開け、空を見上げる。

庭の上に輝くのは、ひびわれた月だ。

隣に立つ涼太の、くもりなく健康な呼吸が息苦しい。

明日は今日よりも成長した自分がいるのだと、信じられる強さが疎ましい。

腰に手をまわして抱き取られるたびに、首に手を添えて顔が近付くたびに、耳元に掠れた声を聞きたびに乖離していくかのような自分を持て余す。それでも扉を開けるのだ。

「しゅーこさんが何を考えてるのか、教えてよ」
教えることはできない。何も考えていないなどと。

下腹部に鈍い重さがくる。

手洗いに入って経血を確認する。
女の生理はいつまでめぐるのか。

「セックスしに来てるんじゃない。しゅーこさんに会いに来てるんだよ」

涼太の腕に肩を包まれながら、自分の気持ちが身体に追いついていないことを知る。

クリスマス・イブの夜、涼太はずいぶんと早い時間に現れ、勝手口ではなく玄関のチャイムを鳴らした。

「しゅーこさん、駅前のライトアップ見てないでしょ？」

駅前をライトアップしていることは知っていたけれど、夕方以降そちらに行くことはなかった。

私が駅を使うのは、客先と細かな打ち合わせがある場合だけだ。

黙っていると、行こう、と手を引っ張るようにもう一度言う。

「一緒に行ってくれないと、ここから動かないよ」

言い張った顔がまったくの子供の表情で、気分が動いた。

本当に座り込みそうな涼太を、とりあえず玄関に引き込む。
まだ夜の早い時間、誰かが見てもどうとでも言い訳ができる。

「コート着て、準備して。ここで待つてるから」

「お化粧くらいはさせて頂戴。そんなに急かさないで」

溜息をつきながら、可笑しくなった。

母親に玩具をねだる時の顔つきは、多分こんな風だったのだろうと想像ができる。

「笑ったね、しゅーこさん」

見返すと、はじめて見る表情があった。

私も涼太の嬉しそうな顔を見たことがなかったのだ、と気がつく。

「やっと笑った。」

つい、と腕が伸びて、私の首に巻きついた。

「すっげえ幸せ」

あまりにあけすけでストレートな言葉に、対処の仕方がわからない。

早く早く、と急かす涼太と一緒に、はじめて外に出た。

通りを抜けるまでに行き過ぎた人は見知らぬ顔で、ほっと溜息をつく。

暗い道の中で、手をまさぐられる。

「止めて。誰かが見たら、変に思うわ」

「なんでそう思うの？ 思わないよ。不倫してるわけじゃないじゃない」

涼太の手が私の指を握って、そのままカーキ色のコートのポケットに押し込まれる。

「しゅーこさんの手は、やっぱりつめたいんだ」

「今日はダウンのジャケットじゃないのね」

人通りが激しくなる前に、手を離す。

「今日はオートバイじゃないんだ。道に長時間置いておけないから。駐輪場に入れるなら駅の近辺にしかないし、そうしたら酒も飲めるし」

ベッドタウンの商店街が工夫を凝らし、クリスマスの飾り付けをしている。

都会に出るほど華やかでなくても、トナカイやスノウマンの電飾が並べられ、花屋の店先にはポインセチアが並ぶ。

洋菓子店の店先にはホールサイズのケーキの箱が詰まれ、家族連れがフライドチキンの箱を提げて笑い合っている。

ずいぶん遠ざかっていた、賑やかな景色。

大学生らしき集団が、早い時間にもかかわらず酔った声の大きさを話しながら歩く。

本当ならば、涼太はあちら側に居る筈だ。

もしくは可愛らしい恋人と、やさしい時間を過ごしている筈なのだ。

「しゅーこさん、お腹空かない？」

向かい合って食事をしたことはない。

まともな会話もしていないのだ。

「どこも混んでるわ。何かテイクアウトしましょう」

「行つていいの？」

戻った言葉と表情に驚く。

「強引に連れ出したから、本当はすぐ怒ってるんじゃないかと思つてた。そうしないと、しゅーこさんは外に出なさそうだったし」

「怒ってないわ」

肩に回そうとした手を外しながら、前を向く。

一緒に居る相手が私でなければ、こんな気など遣わずに楽しい時間を過ごせたらうに。

住宅街に続く道は人通りが少ない。

涼太が空を見上げて言う。

「月が綺麗だ」

仰ぎ見ると、空にはくもりのない月が出ている。

「しゅーこさん」

呼ばれて、顔をあげた。

「しゅーこさんの庭の月は、いつもどこかが欠けてるけど、庭から出れば綺麗な月が見えるんだよ」

「何それ？気障ね」

街灯の下で涼太は一度立ち止まって、私の顔を覗きこんだ。

「庭に居るしゅーこさんは、いつも寂しい顔してるんだ」

寂しい顔になっっているだろうか？

「それでね、俺が隣に居ても、やっぱり寂しい顔のままなの」

家に到着して、少しだけスパークリングワインを飲んで、涼太が食事するのを眺める。

若い男の子らしい健やかな食欲に感心した。

「しゅーこさん、ここに座って」

ソファの横をポンポンと叩き、私を引き寄せる。

「しゅーこさん、笑って。俺にできることなら、何でもするから」
大切なものを扱う手つきで、髪に手が添えられた。

どうか、私をそんなに大事に扱わないで欲しい。

涼太が求めているものは、別れた夫が私に求めたものと同質のものだろうか。

その晩、涼太は唇をやわらかく押し付けただけで帰って行った。

望月

ひとりで仕事していると、時々時間が見えなくなることがある。30日を自分の仕事納めと決めて、大晦日は大掃除と正月準備にあてた。

正月に、何か予定があるわけではない。そう決めてしまわないと、一年の区切りがつかないような気がするだけだ。

涼太は30日の夜に訪れ、正月は友達とスノーボードに行くと行って帰って行った。

女のひとり住まいで、しかも在宅の仕事なので、大掃除といっても普段の掃除を幾分丁寧にするだけだしおせち料理を用意するわけでもない。

ひとりで除夜の鐘を聞いて、夜空が晴れていれば毎日と同じように庭に出るだけだ。

庭に居るしゅーこさんは、寂しそうだ。

でも、俺と居ても寂しそうだ。

寂しいなんて、思っではいなかったのに。

寂しいと思っていたのは、離婚する前だった。

私の差し出すものと夫が望むものは、これだけ違うのだと説明された時のほうが寂しかった。

違う空気を纏ったもの同士が、同じ場所に座っている。

混ざり合わない空気ならば、温度すら感じないほうがいいと思った。あれこそが孤独ではなかったらうか？

涼太の手が、私の指を握りこむ。

体温を分け与えようとして、指を絡ませる。

私が受け取ろうとしていないのか。
受け取ることをためらう原因は——年齢だとか、世間体だとか、将来に繋がる何かだとか——それだけか。
混乱を涼太に押し付けているのだ。

涼太が訪れる筈のない庭に立ち、フェンスの外側を影が通るたびに目を凝らす。

何を待つて、どうしたいのだ。

「しゅーこさん、ただいま」

涼太がスキー場の土産を抱えてきたのは、4日の夜だった。

「昨日の晩来ようと思ってたのに、寝ちゃった。初詣で、もう行っちゃった？」

「どこにも行つてないわ。里帰りしてきた幼馴染が、少し顔を出しに来たくらい。いつもと同じ」

涼太の腕が私に向かって伸びる。

「俺に会いたいとか思ってくれないの？」

「涼太君が、何故こんなに私に会いにくるのか、まだわからないの」

「そんなの、会いたいからに決まってるじゃない」

「どこが気に入ったのか、よ」

そんなことを確認しても、何にもならない。

「顔、指、それにやさしい。でも、他に説明ができない何か」

「やさしくはないかも知れないわよ」

涼太の指が、シャツのボタンを外していく。

胸に唇を這わせながら、もどかしそうに自分のジーンズのアスナ―を下ろす。

涼太の身体は熱い。

女の溜息が聞こえる。

声を立てているのは、私か。

「しゅーこさん」

キッチンからもれてくる灯りの中、涼太が囁く。

「俺を見てよ」

組み敷かれた体勢のまま目を開けると、ぼんやりとした輪郭の涼太に見下ろされている。

訴えかけてくるような視線と絡まり、目が離せない。

「俺をもつと見てよ」

直後、やさしい口が落ちてきて、私の唇の上で「好きなんだよ」と動いた。

瞳の印象を残したまま唇が重なり、穏やかな動きの中で私は深く達した。

見て欲しいと望まれることが、何かを呼び起こしたように。

十六夜

請負先から少し凝った仕事が入り、眼も頭も疲れきって、長い時間庭に出ていた。

居間に入れば仕事用のパソコンが、まだ光っている。

外に勤めに出るのと違って、ひとりの気楽さが閉塞感に変わるときもある。

前日に訪れたばかりの涼太は来ないだろうと思いながら、庭にしゃがみこむ。

上手く切り替えの出来ない日もある。

「しゅーこさん、具合でも悪いの？」

早足に庭に入ってきた影に驚いて、顔をあげる。

「どうしたの？」

「友達の家でメシ食ってた。具合悪いんなら、家に入らなくちゃ」

涼太が私の肘を掴み、立たせようとする。

「大丈夫、具合は悪くないの。ちよつと疲れただけ」

家の中に無理矢理押し込まれて、顔色を確認される。

「急ぎの仕事なの？」

「根を詰めてしまっただけ。もう、明日にするから」

USBにデータを落として、パソコンをオフする。

涼太がキッチンで、なにやらパタパタと動いているのが見えた。

「しゅーこさんがいつも飲んでるヤツ、どうやって作るの？あの甘いワイン」

手順を答えながら、またふつと可笑しくなる。

「いいのよ、そんなことしなくて。涼太君は飲めないでしょう？」

「俺はいいの。遊んできたんだから。疲れた上に冷えちゃってるし

「ゆーこさんが優先」

小学生みたいな生真面目さに、吹き出してしまった。

涼太の顔も緩む。何かがほっこりと暖かい。

この感覚は知っている。何年も忘れていたけれども。

これは「相手のために何かせずには居られない」気持ちだ。

「しゅーこさん、何かして欲しいって言わないくせに、『ダメ』は言うんだもん」

して欲しいことなんて、今まで考えもしなかった。

「俺、しゅーこさんに対してすっごく役立たずみたい。自分だけがあーしたいこーしたいってガキ。何かしたいのに」

子供じみた言い分に返した言葉は、けして傷つけるためではなかったのに。

「何かしたいって、ママのお手伝いみたいに言われても」

ざっくりと傷ついた顔の、涼太の動きが止まるのを見た。

詫びなくてはならない。けれど、それは何に対しての詫びだろう？
不用意な言葉を口にしたため？

その不用意さが自分にまで刺さるとは思っていなかった。

「俺がガキだから、しゅーこさんは俺を見えてくれないの？」

暖かかった心が、一瞬にして冷たくなる。

「ガキは役に立たない？」

こんな風に正面切って言えることが若いのだと、この子に伝えて伝わるだろうか？

「ごめんなさい。そんなつもりはなかったの」

こんな言葉は、私に対しても涼太に対しても、何の役にも立たない。

黙ったまま居間に戻り、黙ったまま並んで座る。

涼太の手が髪に触れる。

「そんな顔させて、ごめん。でも、年齢のことはすごく痛い。頑張ったって追いつけないもん」

涼太はやさしい。

何故こんなにやさしくしてもらえるのか、私にはわからない。

「今日寄ろうと思ったのは、満月だから。しゅーこさんがひとりで月見てるだろうと思ったからなんだ」

手をとって、外に出ようと言う。

シヨールを肩に掛け、一緒に外に出た。

「庭じゃなくて、道に出て」

手をしっかり握ったまま、涼太が小声で言う。

空を仰ぐと、白い月が中空に輝いていた。

ひびの入らない、満月。

指先に絡まる涼太の手の温度。

なんて美しい月なんだろう。胸が詰まる。

「しゅーこさん、なんで泣くの？」

問いかけてはじめて、自分が涙をこぼしていることに気がついた。

涼太の心配そうな視線が、私の顔の上に漂う。

手を伸ばしていいだろうか？受け入れてもいいんだろうか。

私に差し出されたものを、私のものだと思っててもかまわないんだろうか。

涼太が私の携帯電話に自分の電話番号とアドレスを残したのは、その晩だった。

「今まで、連絡先も知らなかったって変だね。来れば居ると思つて。だけど、しゅーこさんから連絡できなかったね」

自分から連絡するなんて、思いもしなかったことだ。

連絡先ができると、涼太は明るい時間に頻繁にメールを寄越した。

おはよう。友達と昼食中（写真が添付されていたりする）。授業が終わった。バイトがある。

返信はしたりしなかったりだけれど、涼太の生活が目に見えて色をつけ始める。

とても強引に誘われて、夕方の水族館にも足を運んだ。

薄暗い通路で手を握られて、思わず引き剥がそうとすると、「誰も気にしない」と逆に痛いくらいの力が入った。

自分が思うほどに他人は気にしない。理解はしているが、自分が気にしている。

ガラスに映った私たちは、現実がそうであるように、「親子程も年齢が違う」のだ。

涼太の美しい顎のラインを見るたびに、鏡の中の自分の肌を確認するたびに、身にそぐわない服を纏っているような違和感を拭い去ることはできない。

他人の視線よりも自分の感情の行く末が大切だ、なんて強さは持ち合わせていない。

夕方から降り出した雨が本格的に雪に変わった晩、涼太は電車で訪れたにもかかわらず、終電の時間を無視して居間に居続けた。

「これじゃ、しゅーこさんの軽自動車じゃ危ないもんね。泊るしかない」

はじめからそのつもりで、という意図はもちろん感じていたのだが、責める気にはならなかった。

雪は思いの外降り積もり、庭が白く変わる。

外の音はすべて吸い込まれて、私の居間だけが孤立しているようだ。灯を消してカーテンを開けると、白く光った庭の上に、白い花を枝いっぱい咲かせた木々がある。

傍らには涼太の呼吸を感じる。

唐突に、幸せだと思った。

このまま時間が止まれば良いと思った。

他人からどう見えるとか、涼太が私に失望する時が来るとか、それはこの時間にはどうでも良いことだ。

ここで時間が氷漬けられてしまえば。

もちろん、そんなことがあるわけではない。

はじめて私の寝室に足を踏み入れた涼太の、満足そうに飲み込んだ呼吸は忘れない。

翌朝目覚めた時に、横に眠る涼太の健康な寝息を聞いたことも忘れない。

目を覚ました涼太が「おはよう」と言いながら、清々とした笑顔でキッチンに入ってきたことも。もう、それだけで充分だ。

居待月

「柊子ちゃんのおうち、最近よく人が来るのね」

隣家の主婦に声をかけられて、身が縮まるような思いをした。

二度ばかり涼太が泊っていった後だった。

「柊子ちゃんがずっと一人で生活してるから、心配してるのよ。いい人がいるといいなあって」

「うーん、残念。そういう人じゃないんです。そういう人が居れば歓迎なんですけど」

心にもないことを言う希薄さは、自分を守る壁なのかも知れない。

仕事の打ち合わせのために何度か外出する用事があり、請負先にも顔を出すため、他人と顔をあわせる日が続いた。

ターミナル駅で結婚する前に勤めていた会社の同僚に会ったのは、偶然だった。

「坂口さん？久しぶりだね。今、何してるの？」

仕事中であろう元同僚は、営業の途中だから少しだけ、と私をお茶に誘った。

別れた夫は取引先の社員だったので、離婚したことは聞いているだろう。

仕事の話でもなく、涼太相手でもない、同年代の男性とただの世間話をする機会なんて、持って居なかった。

何人か残っている同僚の消息を聞き、別れた夫が再婚したらしいことも聞いた。

同年代との会話はテンポが合う。なんて呼吸が楽なんだろう。ひとしきり話をして、妙にすっきりした気分であ別れた。

「しゅーこさん、今日K駅に居たでしょう？」

涼太に言われて、涼太もその駅を利用していることに気がついた。

「居たわ。見かけた？」

「声かけようかと思ったら、男が一緒だったから。すごく楽しそうにしてたし」

「若い頃勤めていたところの同僚だったの。久しぶりだったのよ」

涼太の不満げな顔に、口にお茶を運ぶ手が止まった。

「すつごく楽しそうに笑ってた。俺と居ても、あんなに楽しそうにしてない。それに、並んで座ってても不自然じゃなかった」

どう答えたら良いのだろうか？

私こそが涼太を取り巻く環境に臆して、涼太の隣を歩くことに怯んでいるのに。

しがみつくように「しゅーちゃんと同じだけ大人になりたい」と言う涼太は、あまりにも幼くて痛々しい。

彼が嘆くように、私もまた同じだけの痛みを持っているのだと告げて良いのだろうか？

告げれば涼太を傷付けるだろうことは、理解している。

おそらく関係が続ける間中、それが何かの枷になることを、彼は覚悟していない。

後期の試験が近いからまとめてゆつくりしていくんだ、と涼太が土曜の夜から日曜の夜まで、丸一日私の家にいた日があった。

私が家の中を移動するたびに、一緒についてくる。

「座敷犬じゃないんだから、落ち着いて頂戴」

「犬なら、しゅーこさんに飼ってもらえるのにね」

聞いている音楽も、読んでいる本も違う。

食事の量は私の三倍よりも多い。

古い家の鴨居に頭をぶつけそうになる。

私が驚くたびに涼太は愉快そうに笑った。

「まだ、覚えてもらうことがいっぱい。俺も覚えなくちゃならない

ことがいっぱい」

他の目のない家の中は、穏やかでやさしい時間が過ぎる。

「しゅーさんは、怖がりなんだね」

ふいに言われた。

「何か言ったびに、俺がどんな反応するのか顔を確認する。それで俺が何か言つと、他の意味があるんじゃないかって顔する」

ぼんやりして、他人の話を聞いているかどうかわからない。

別れた夫は私にそう言っていたのに、涼太にはそうは見えないのか。

「俺、しゅーさんが思ってるよりも頑丈だから」

「見せて」

明るい時間の居間で胸を開かれて、声を失う。

「俺がしゅーさんを好きなのに、しゅーさんが俺の顔色見るのはおかしいよ」

反論を吸い取られ、腰を絡めとられて逃げ出せない。

おまえは何をしているのだ、高い所から声がする。

少しの間見逃して欲しいと懇願する相手は、誰なのか。

家の中だけで満たされる気配は、それ以上の何も必要としない。

留まる筈のないもの。

狭い空間だけの完結はすぐに亀裂が入るものと、知っているのは涼太の方ではない。

臥待月

試験の期間が迫り、涼太の足が少し落ちた時期だった。

本当は、それより前から気がついていたのかも知れないけれど、気のせいにしていた。

生理が、遅れていた。

避妊しないでセックスすれば、妊娠するのはある意味、当然だ。

そのための行為なのだから。

別れた夫との間に子供はできなかったし、なんとなく妊娠しにくい体質なのだと自分で思い決めてしまったいた。

薬局でマーカーを購入し、陽性反応を確認した。

確定するにはもちろん病院に行かなくてはならないが、自分では間違いないと確信している。

子供！涼太の！いや、違う。

私の子供だ。

次に頭に浮かんだことは、「告げてはならない」ということだ。

涼太はその事実を受け取れる力は、まだ持っていないだろう。

産むにしろ産まないにしろ、彼はどちらの結論も、おそらく納得しない。

私だけが選択し、涼太に知らせることなく――

産まないという選択をした場合、私はこのまま涼太の顔を見続けることができるだろうか？

腹に宿った生命を切り捨てて、何事もなかったかのように今までの生活を続ける。

隠し通すだけの覚悟はできるだろうか？

涼太が私に倦みはじめるまで、または私が涼太を疎ましく感じるまで。

そして、その後には何も残らない。

産むという選択をした場合、今すぐ涼太との関係を終わらせなくてはならない。

彼に「父親」を求めたところで、責任だけを押し付けて心がないがしろになることは、否定できない。

私は涼太と一緒に歩く未来すら、夢見たことはないではないか。では、父を知らないで生まれてくる子供は、どうだ。

そもそも私は、子供が欲しいと思ったことはあったのか。

最早、どちらにしろ手の中に涼太の残る選択肢はないのだ。

迂闊だったとは思う。

けれど、事實は消えない。

涼太が私を求めた事実として、生命が宿った。

私は充分だと思えるほどの、幸福な時間を過ごしたではないか。ほんの短い時間だけだ。

経済的には問題はない。

問題があるとすれば、すべて私に関することだ。

私が手を伸ばすべきものがどこにあるか。

世間に対するものもあるし、これから背負うべきものの重さを比較してみたりする。

何よりも、私はどうしたいのか。

私を必要とするものが、私の腹に宿っている。

その連想は、私に甘美な陶酔を与えた。

「いてもいなくても構わない」ではなくて「必要とされる」のだ。自分の生活を守るだけではなく、他に守るべき責任が生じる生活。

この機会を逃せば、もう一生見ることもないだろう信頼だけの関係。

そして、私の中の女の生理が強く私を結論に導く。

別れた夫に対して「彼でなくては」とは、多分思っていなかった。

涼太が欲しいのか欲しくないのか、私にはわからなかった。

わからないものを掴むよりも、欲しいものに手を伸ばそう。

私は今までそれをして来なかった。すべてが流れるままだった。

ひどくエゴイスティックだとは思う。

高齢の上ひとり親で、豊かな生活はできないかも知れない。

助けてくれる人間もいない中、私だけでは解決できない問題で、動きが取れなくなることもあるだろう。

古い住宅地の閉鎖的な人間関係で、他人の噂話は何より怖い。

たくさんの否定的な予測はある。

それでも、と思う。

それでも、私は結論を出したのだ。

私が今一番欲しいものは、涼太との不安定な時間の継続じゃない。私でなくては為し得ないことをする。

私の子供を産むという行為は、私にしか出来ない。

涼太の後期試験が終わるまで、待とう。そこで断ち切らなくては。

もしも涼太が私の決定に気がついてしまったら、彼は悩もうとする。責任がどうこうと言いだすかも知れない。

そんなものは、いらない。

生活の中から涼太の影を消すのは、難しいことかも知れないが不可能ではない。

夫と別れた時のように、何かを残しながら薄くなってゆく筈だ。

両親の死ですら、時がたてば悲しみは薄らいでいったのだから。

涼太は、きつとすぐに忘れる。

若い頃の恋愛は、えてしてそういうものだ。
じきに似合いの歳回りの相手と、未来に繋がる恋愛をはじめらう。

話題に共通点のある、もしかしたら同じ目標に向かうことのできる、誰からも不思議に思われない関係で。
そう思うと、胸がチクリと痛んだ。

私は悲しむだろうか？

手にしかけたものから手を離れたことを、後悔するだろうか？
夜の庭で、フェンスの向こうに目を凝らす自分が見える。

来ないものを待つ絶望感は知っている。

その絶望感は、予測のできない喜びよりも小さいものなのか。

正しい選択ではないのかも知れない。

ただ、私は決めた。

私の望むことは、涼太との時間の継続よりも、私を生に執着させるものを持つことだ。

私の決定に涼太が横槍を入れるようなことは、させない。

試験の最終日に訪れた涼太がフェンスの向こうに歩いていく後ろ姿を、庭で見送った。

私の目を確認しながら話す涼太に、はじめから誤魔化すことは難しい。

メールの文面は、何度も確認した。明日の昼過ぎに送信する。

空を仰ぐと、何日か後には満ちる月が枝でいくつかに割れていた。

しゅーこさん、こんばんは。

しゅーこさんは、いつも寂しい顔してる。

俺をもつと見てよ。

——ごめんね。

涼太君より大切にしたい人ができました。

もう、来てはいけません。

ごめんなさい。

私から送信したのは、はじめてだった。

弓張月

オートバイの音が家の前で止まったのは、メールを送信してから1時間も経っていなかった。

学校にいる間は動けないと思っていた私の思惑は、はずれていたのだ。

乱暴に何度も玄関のチャイムが押される。

鍵をあけたと同時に扉が開かれ、私の身体を家の中に押し戻した。

「授業は」

「なんだよ、あれ！」

二つの口から同時に言葉が出た。
目を逸らしてはいけない。

「送った通りよ。もう、来ないで」

声が震えてしまうのは、抑えきれない。

涼太の蒼白な顔は怒りのせいだと思った次の瞬間、押し寄せてきた感情に流されそうになる。

「そんな顔させてごめん」と言ったやさしさは、もう私には向けられない。

私の指を唇にあてて「つめたい」と動く時の息の暖かさは、もうない。

まだ節くれだつていない指、しなやかな筋肉のついた腕、熱いほどの体温、それを感じることはなくなるのだ。
自分で選んだものに、自信が持てなくなる。

まだ冗談にしてしまえるかも知れないと、自分の中の何かが囁く。

「大切にしたい人って、何？」

涼太の言葉で思考が戻った。

大切にしたい人という言葉は、嘘ではない。
玄関から居間に場所を移す余裕ができる。

私は、涼太が逆らい得ないものを、知っている。
主語さえなければ嘘にはならないが、涼太の誤解が最大限に利用で
きる受け答えくらい用意している。

涼太の未経験さや無防備さは、思い込みを強くする要素になる。
私がすることは、返事をする事だけだ。

誰？涼太君の知らない人。

どんな風に？これから先、ずっと私を必要としてくれる人。

俺より、そっちを選びたいって？ええ、そう。

いつから？ここ何週間か。

黙ってたの？そう。

一緒に暮らそうとか言われたわけ？そう、決めたのよ。

俺が子供だから？それもあるわね。

「じゃあなんで！」

涼太の手が強く私の肩を掴んで、痛い。

「昨日もその前も、なんで俺としたんだよっ！」

執着の強さ分の怒り。もつと怒ればいい。許せないほど怒ればいい。
そして私を許さないまま、離れて行って欲しい。

涼太の声が感情的になるほど、冷静になっていく。

ごめんなさい。でも、もう来てはいけない。

乱暴に組敷かれて、手荒にシャツを捲りあげられても、涼太が欲情
しているわけではないことを知っていた。

覆い被さるように腕をまわした涼太が、小さく「なんでだよ・・・」
と呻くのを聞いた。

ごめんなさい、ごめんね。

本当のことを告げない後ろめたさを、私は幾つも詫びの言葉に変えた。

玄関の灯りを消し、光の漏れない遮光カーテンをきちんと引く。

外に灯りの漏れる部屋に電灯は点けず、気配を殺して夜を過ごす。

家の前をオートバイの通る音がする。

少しだけ速度を緩めて、通り過ぎる。

― 苦しい。顔だけでも見たい。

― 電話だけでもいい。声だけでいい。

― もう一度でいいから、庭に出て。

いくつもメールが送られてくる。

返信はしない。息を潜めて家の中にいる。

オートバイの音は、夜の間に何回も行き過ぎる。

この通りにオートバイは他には通らない。

時々、夕方に玄関のチャイムが押される。

私は出られない。涼太ではないのかも知れないが、涼太かも知れない。

私が外に出るのは、涼太が登校している時間に限定される。

― 何でもするから。

涼太に出来ることは、少なくとも私がして欲しいことは、ないのだ。

もう一度顔を見せてしまったら、私の決意はあっけなく揺らいで、すべてを話してしまいそうな気がする。

息を潜めながら、オートバイの音を待っている。

なんて矛盾なんだろう！

早く、私とは別の人と恋をして。

そこでオートバイの音を響かせていて。
相反した感情だけが、自分の中で渦を巻く。
選んだのは間違いなく私だ。他の選択肢は捨てたのだ。
選り取ったものに悔いはなく、それが私のたった一つの真実である
のに。

月が見たい。

白く輝く月を、掴み取りたい。

オートバイの音を待つことなく、息を潜めて部屋に隠れることもな
く、月の光を見たい。

朔、或いは望

オートバイの音を待つてしまわないために、駅の逆側にある月契約のアパートを3ヶ月だけ借りた。

大した無駄遣いだとは思ったけれど、それよりも涼太の前に飛び出しそうな自分が怖かった。

3ヶ月は、20歳の若者が終わってしまった関係を自覚するには、充分な期間だと思う。

学生時代の友人の一人に、理由を簡単に説明して保証人になってもらった。

「結婚できない事情って、不倫？ 柊子ったら、ただおとなしいだけじゃないわね。ストーカーにならないといいけど」

相手と親子ほど歳が離れているとは、言えなかった。

「子供が産まれたら、手伝うわ。大丈夫よ、最近は婚外子なんて珍しくもないから」

朗らかに笑う友人は、やはり離婚した後ひとりで子供を育てている。

無意識に同志を求めたのかも知れない。

私だけではない、手を貸そうとしてくれる人がいると思うだけで、こんなに安心する。

自宅を手放すわけではなく風を通しに帰るのだから、荷物は少なかった。

仕事に使うPCと着替え少々。

両隣には、仕事でしばらく留守すると報告した。

依頼がたてこんで請負元に泊り込むのだと言うと、在宅の仕事など想像もつかない年配の主婦たちは、心底気の毒そうな顔をした。

「柊子ちゃんは、自分の力で食べなくちゃならないんだものね。お

相手、探さなくちゃ」

「自力では探すのが難しいので、お願いします」

来年の今頃は、彼女たちはこんなことは言えなくなる。

詮索をシャットアウトできるだろうか。

月契約のアパートには、必要な家電が揃っている。

カーテンだけをつけて部屋を見回すと、すぐに睡魔に襲われた。オートバイの音を待つて、浅い睡眠しかとっていなかったのだ。

ぽっかりと開いた穴に、新しい生活への展望を落とし込む。できるうちに仕事を増やしてもらえるように、請負元に連絡しなくては。

住宅街の静けさと違う生活音と、アパートの前を時折通る車やオートバイの音は、私には関係のないもの。

なんでだよ。

時折、苦しい声か耳の中に蘇る。

差し伸べられた手よりも、必要なものが目の前にあった、それだけのことだ。

違和感のある場所で眠ることに慣れてきたと同時に、ひどい悪阻が襲ってきた。

詰込み気味にした仕事と、気を抜くとこみあげてくる吐き気に追われて、ひどく消耗したけれど余計なことを考える時間がなくなった。自分の家に風を通しに帰る時、居間のソファの上に座る涼太を見たり、道で大型のオートバイとすれ違つとヘルメットの色を確認したりすることは、ある。

そんな時は手にとらなかつたものを惜しむ気持が、ねじ切れるような痛みと共に表面に浮かんでくる。

それでも、涼太に「子供ができた」と言いたくはなかつた。

涼太からのメールの数は減っていた。

―勝手な人だね。

責めるような言葉が混ざる。

―もう一度だけ、顔を見せて。

懇願が混ざる。

読まないで消去することはなかった。返信はしないけれども。

清々と笑う涼太の顔をもう見ることはできない。そう思うと、また胸がチクリと痛んだ。

桜の花芽が静かにふくよかさを増す。

辛夷、木蓮、ハナモモ、桜と春の訪れを告げながら庭に舞う花びらたち。

夜の花吹雪をガーデンライトが照らし、その中に立つと祖父や両親に守られている気がしていた。

孤独だったのだ。自覚するよりも深く孤独だったのだ。

しゅーこさんは寂しい顔をしてる。

涼太の言ったことに間違いはなかった。

膨らんでもいない腹に手をあてる。

私をこれから生かそうとしているものが、ここにある。

何よりも強い力が、ここにある。

これ以上に私に必要なものはなく、これ以上に私を必要とするものはない。

桜が散る頃まで頻繁に続いた涼太からのメールは、少しずつ文面が落ち着いて行った。

―国家資格を取るための準備をしてる。

―もう、誰かと暮らしてるの？

―今年の桜は去年よりも遅めだったね。

返信は、やはりしなかった。

四月の終わりに、長いメールが来た。

―返信が来ないのはわかって、メールなんかする俺はバカだ。顔を見て名前を呼びたいって思っても、しゅーこさんは俺に会う気はないんだから。

こんなメールしたって、本当は困るよね。子供だから駄々こねてるんだって思うよね。

だから、もういい。幸せになってなんて、言えないけど。

しゅーこさん。好きだ、好きだ、好きだ！それだけ。じゃあね。

深夜だった。酔っていたのかも知れない。

そして、そのあとメールはぶつりと来なくなった。終わったのだ。

もう、おしまい。

呪文のように呟いて、狭いアパートのガランとした部屋を眺めた。ひよろりとした影が、フェンスの向こうに消えてゆく瞬間を見る。私の庭は、もう葉が幾重にも重なって、月など見えないだろう。

部屋の隅の壁にもたれ、抱えた膝の中に顔を埋める。

これで、満足？

自分に問いかける。

満足のいく答えなんて、常にはないのだ。

答えはこれからの私の中にある。

五月も終わりがけた頃、アパートの契約も残すところ二週間を切った矢先のこと。

腹の下に泡が浮いたような違和感があった。

超音波でしか確認しえなかったものが、存在を主張し始めたのだ。気をつけなければ見逃してしまう感触に、注意を払う。

思い出したようにポコリと泡が浮かび上がる。

帰ろう。私の庭に帰ろう。

枝を少し払い、その下に立って月を見よう。

次に庭から見るのは、ひびの入らない美しい形の月だ。

インターネットで植栽の業者を探して、電話で依頼する。

しゅーこさんが呼ぶんだ。

私の内側から、女が呼んだのかも知れない。

ごめんね。

月が満ちて、満月になる。

月が満ちて、私は子を産むだろう。

腹に手を当てる。私を入れている容器を、こんなに愛おしいと感じたことはなかった。

軽自動車に簡単な荷物を積んで、家に帰った。

隣家の主婦が私の姿を見て、一瞬まじまじと腹に目を留める。笑顔を作って通り過ぎた。

枝払いの済んだ庭から、空が見える。

今夜は月齢十四の月が中空に見える筈だ。

何日か、夜が過ぎた。

梅雨に入る前の月は、高く美しかった。

遠くから響くオートバイの音に耳を澄ます。

この通りには、もうオートバイは通らない。

涼太からの連絡は、もう来ない。

カフェインは、身体が欲しがらなくなった。

体重はあまり変わらなかったが、自分の腰まわりの変化に驚く。

決意を翻す気はなかったし、どちらにしろ引き返せる時期は過ぎた。昨日、耳打ちのように言われた「妊娠してるの？」の問いに、笑って答えることができた。

そうです。旦那さんがいないから、せめて子供だけでも持とうと思っ
て。

堂々と答えることが、詮索封じになれば良いけれど。

庭の緑が濃さを増す。

窓を大きく開けて、深呼吸をする。

腹の中で何かがポコリと動く。ここにいる。

高齢の上ひとりなので、常に入院の準備をしておかなくてはなら
ない。

タクシー会社の電話番号を記憶させた携帯電話は、手放せなくなっ
た。

枝を何本かはらっただけの空は狭い。

月は中空を通る時、私に姿を見せる。

足が攣るようになってきたので、ガーデンライトの下に小さな椅子
を置いた。

フェンスの外側に人が通ったとしても、それは涼太ではない。

もしも次に涼太に会うことがあるとすれば——夢想到過ぎないこと
を知っているけれども——不意打ちのように訪れる出会いと激情で
はなく、改めてお互いを探しあうことから始めたいと思う。

痛みは少しずつ薄れていく。

私はもう、庭に居ても寂しい顔はしていないはずだ。

流れの中に身を委ねたわけではなく、欲しいものに手を伸ばした充実
感がある。

私を今、虚無だと表現する人はいないだろう。

身体という容器の中に詰まった私自信が、うねりながら進みはじめ

るのを感じる。

目をあげると、葉の隙間の東の空に欠けはじめた月があった。

f i n .

朔、或いは望（後書き）

最後までお読みいただき、ありがとうございました。
作者としては、これもひとつのハッピーエンドだと思っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4375q/>

crack moon

2011年2月20日19時25分発行